

大震災から1年 団員たちへ何を伝えるのか？

代表指導者 小 出 利 一

3月11日14時46分 忘れられないあの日あの時。1年前のあの時間、私は大学病院で患者さんと病院を守ることで精一杯でした。そして、団員たちが楽しみにしていたスキー合宿を初めて中止決定しました。今年は、スキー合宿中に11日14時46分を迎えて参加したすべての人が震災犠牲者へゲレンデで黙とうを捧げました。この行為を私がフェイスブックで伝えると東北被災地の仲間からたくさん、お礼メールが届きました。3月18日、群馬大学病院では震災シンポジウムを開催して、釜石の子どもたちを津波の被害から救った群馬大学工学部の片田教授から講演をしていただきました。

片田教授が釜石の子どもたちへ指導した言葉を下記に記しますので、大人が考えて子どもたちへ何を伝えるのかももう一度考えるきっかけにしてください。

- 1 自分の判断で行動できることを身につける
- 2 自然を甘く見ないで勝手に被害を想定するな
- 3 ともかく逃げろ、そして最善をつくせ



この言葉で指導された釜石の子どもたちは、大人が世界一の堤防があるから津波はここまで来ないという言葉信じないでみんなで逃げました。

逃げる時に、中学生は自分たちだけで逃げるだけではなく、小学生の手を引いて、保育園の幼児を抱きかかえ、デイケアセンターの老人を車いすに乗せて指定された避難場所へ向かいましたが、海の様子から冷静に判断した中学生がここでは危ない、もっと上の避難場所へ行くことが最善の策だと判断。大人たちを説得して再度逃げました。そして、最善の場所へ逃げた30秒後に最初に避難した場所は津波に飲み込まれたそうです。もし、「最善をつくせ」の指導を守らなければ600人以上の人が同じ場所で亡くなり、地域の宝でもある子どもたちの命がたくさん失っていました。釜石の大人たちは、子どもたちが町を救った。と話しているそうです。講演を聴いて、私自身、大型台風で洪水になると町全体が水没する危険性が高い地域に住んでいるながら真剣に考えて備えていない自分に反省しました。

普段の活動でも「自分の判断で行動する」ことを指導していますが、これは、学校だけで指導することではなく、地域と家庭が一緒になって考えて心を鍛える必要性を強く感じました。保護者のみなさん、何を感じて何を備えますか？子どもたちと一緒に考えてください。中学生団員、SVCの君たちは釜石の中学生と同様に幼児や老人を守る勇気がある。それは、普段の活動やイベントで活躍している姿から感じる。でも、まずは、自分の命を大切にすること。沖縄で教えを受けた命の大切さを思い出して自分が地域で何ができるのか真剣に考えてください。君たちが新町を守る力の源になれ。

新しい年度 団員募集をみんなでしましょう。
新しい仲間を増やして元気な新町っ子を増やそう！
ともかく、活動に参加してもらってください。

【通常活動】

4月1・8・15・22・29日 10時～12時
全て新町第一小学校校庭と体育館

